

指 導 講 評

福島県教育庁高校教育課

指導主事 持地 勝博

ただいまご紹介いただきました、持地と申します。閉会の前にお時間をいただきましたので、お疲れのところではありますが、もう少々お付き合い願えればと思います。

先ずは昨日、今日と2日間にわたりまして、総会、研究協議、教育懇談会、講演会とお疲れ様でした。特に、昨日の研究協議で発表いただいた6名の先生方、資料の準備から発表まで苦勞されたのではないかと思います。また、各分科会で指導助言をしていただいた各県の指導主事や教頭先生、それから司会、運営担当の先生方、本当にありがとうございました。本年度は、東北地区の校長会と研究協議会が合同で開催されました。本大会の事務局をお務めいただきました、福島県立福島明成高等学校、会津農林高等学校の各校長先生を始め、諸先生方には、準備から運営まで、きめ細やかなお心遣いにより、大変貴重な研修の場と情報交換の場を提供していただきましたことに、心から感謝申し上げます。

さて、連日、35℃を超える猛暑が続き、まったく雨が降らない期間が続くと思えば、ゲリラ豪雨や雹の被害があるなど、環境の変化は、常に生産者の皆さんを不安にさせているところです。先月、甚大な被害をもたらした西日本を襲った集中豪雨は、未だに大きな爪痕を残したままです。

このように自然を相手に不安を抱える農林業ですが、少子化による社会構造の急速な変化は、今日の農林業にも様々な変化をもたらしております。およそ20年前と現在の農業の状況を比較しますと、農業の就業人口は、414万人からおよそ半分の210万人に減少し、農家の平均年齢は、59歳から7歳上昇し、66歳となっています。増える耕作放棄地は、7割増加し、現在富山県と同じ面積の42万ヘクタールに拡大しています。このような状況は、農村社会の継承・維持を困難なものにしています。

では、農業は、これからどうなっていくのでしょうか。不安視するばかりの農業ではあっても、我々の生命を支えるという使命はもとより、大きな魅力と潜在力を有しており、これらを積極的に次世代に引き継いでいかなければなりません。

現在、日本食は、2013年にユネスコ無形文化遺産に指定されるなど、世界から注目を集めており、海外における日本食レストランの数は11万店を超え、この2年間で3割も増加しています。日本食の海外への普及と足並みを合わせるように、海外への農林水産物・食品の輸出額は、昨年8,000億円を超え、5年連続で過去最高を更新しています。農業総産出額は減少傾向にありましたが、この2年間では増加に転じ、16年ぶりに9兆円台に回復しています。

また、農業は、先端技術との融合を図ることにより、「スマート農業」の言葉が生まれるなど、より効率化が図られ、魅力ある産業として変革の時期を迎えております。農業の法人化や企業の参入など、社会全体が停滞してきたわが国の農業を盛り上げていかなければならないという危機感の高まりであることは事実であります。

様々な課題や魅力を有する農業だからこそ、学ぶ生徒たちには、より高い目的意識を持ち、自らが魅力と情熱を持った職業人として成長することは、我々農業高校が課せられた社会の使命であるといえます。

そういう意味からも、本研究大会が「生徒の『生きる力』を育む活力ある農業教育の創造と実践」をテーマに掲げ、東北各県における優れた取組について発表したり、実践的な農業教育の在り方について共通理解を深めたりすることは、誠に意義深いことと考えております。時間の関係上、全ての分科会の発表を拝見することはできませんでしたので、発表資料を基に述べさせていただきます。

第1分科会では、『主体的・対話的で深い学び』に対応した教科指導はどうあればよいか』について協議がなされました。秋田県立秋田北鷹^{ほくよう}高校の千葉先生は、緑地環境科における指導について、1年から3年次の課題研究に至るまでを、系統的に結びつけることを意識され、取り組んでいることがわかりました。地域課題を学習テーマに掲げ、学んだことを生かすことにより、地域の職業人として意識づけることが、深い学びにつながるとともに人間性も育むとのことでした。

もとよしひびき
宮城県本吉響高校の昆野先生には、総合学科校における実践例をご紹介いただきました。幼稚園児との交流など、体験的な学習を通じて、生徒の知識の整理、コミュニケーション能力の育成、段取り力、積極的な姿勢を向上させること、学習への深い理解をもたらすことを紹介いただきました。農業学習を通じた人間育成の視点を持ちながら、交流を重視していきたいとのことです。

お二人の発表は、学習内容や授業の設定が異なりますが、体験的な活動を通じて課題の解決を図ることにより、知識や技術の定着はもとより、地域に対する意識づけや豊かな人間性の涵養を図る一歩進んだねらいがありました。生徒がおもしろいと思えるような仕掛けを、系統的な視点を持って、用意する工夫が、重要であることを再認識できる発表となりました。

第2分科会では、「社会のグローバル化に対応した安全・安心な農業教育及び関係機関と連携したキャリア教育の推進はどうあるべきか」について協議がなされました。

岩瀬農業高校の金成先生は、平成28年度から科名変更により新設されたヒューマンサービス科における取組を中心に御紹介いただきました。教育課程は、主に園芸を中心に福祉との関連を持たせた学習に力を入れており、全国的にも珍しい学科であると思います。農業クラブを活用し、学年を超えた体験的な取組を実践しており、こども食堂を舞台に、地域の課題を盛り込んだ農業学習に取り組んでいます。交流学习から、

キャリア教育が目指す基礎的・汎用的な能力の視点を振り返っていただきました。農福連携は、今後も期待される分野であることから、ヒューマンサービス科の教育活動がさらに系統的に整理され、より一層充実されることを御期待いたします。

青森県立名久井農業高校の竹鼻先生は、平成25年に新設された、農業と工業の二つを融合した学習に取り組む、環境システム科の取組を紹介していただきました。施設園芸分野の発展は、植物工場の普及を見てもこれからも重要な分野であります。水耕装置などの作製から生産技術までを学ぶことができる環境システム科の多様な取組は、他県においても参考になるものでした。社会のニーズに、学校が柔軟に応じていくことは、子どもたちに社会が求める人材を明確に示す第一歩であります。学校の統合、再編が進む中で、教科の連携という次元から、教科の融合というさらに一歩進んだ取組として、とても参考になるものでした。

キャリア教育ですが、次期学習指導要領では、総則「特別活動」の中にあるホームルーム活動に、「一人一人のキャリア形成と自己実現」として位置づけることになりました。生徒の望ましいキャリア発達を促すためには、ホームルーム担任との連携を図りながら、学校内すべての教育活動を通じて実現するのが理想であります。例えば、職業体験により進路意識を高揚させる目的で、インターンシップを取り入れている学校が多いと思いますが、進路指導を担当される部署やクラス担任の先生だけに任せるのではなく、各学科が、所属する生徒の事前指導やふりかえりの指導に協力すれば、主体的な農業分野への進路選択を促すことになると考えます。

第3分科会では、「生徒の実践的・体験的な学習活動を推進するための農場運営はどうあるべきか」について協議がなされました。

大船渡東高校の谷地先生は、農業科1クラスと他の専門学科からなる「総合的な専門高校」として創立10年目を迎えた農芸化学科の取組を、6つの事例を挙げ、農場を生かした地域との交流学习、プロジェクト学習の取組を紹介いただきました。いずれの取組も発表テーマに合致した実践的かつ体験的な取組であり、学科間を横断的に学習するカリキュラム編成を有効に効かせながら、学校全体が、農業教育を通して地域の職業人を育む視点を持っていることが大変参考になりました。

山形県立庄内農業高校の笹原先生は、昨年度より新学科2学級でスタートを切り、農場規模の適正化を図りながら、農場を活用した取組例を紹介いただきました。大きく二つの事業を御紹介いただきましたが、いずれも鶴岡市との連携を図り、地域との交流、地域資源の活用という、教育効果の高い内容を計画的に実施されておりました。課題に挙げられていた、学級減にともなう教職員の削減は、農場維持に大きく影響しておりますが、発表の最後に、「生徒の農場学習が、農場維持の労働力となつてはならない」という言葉は、発表を聞いた皆さんも共感できたのではないのでしょうか。

さて、学校農場は、実習を通して学んだ知識を深めたり、小学生や幼稚園児といった来校者との交流を通して豊かな人間性を育んだりするなど、生徒の実践的態度を育てる貴重な場です。各学校では、学科改編等に伴った部門の再編や予算の見直しなど、大きな課題を抱えていることと思いますが、学校農場が教育農場として機能しているのかといった視点で農場のあり方を考え、地域産業を担う人材の育成に努めていただきたいと思います。

次に、分科会全体を通して感じたことを申し上げます。昨年度、山形県における提案を受けて、今回よりグループ協議を取り入れ、発表に対する意見を集約し、共有するという方法がとられました。各校が抱える課題を解決する糸口が、互いの意見交換により見いだすことができたのではないのでしょうか。発表者への質問についても、グループ間で話し合われたことを基に、要点をしぼったものになり、限られた時間を有効に活用することになりました。

2点目として、発表者は学校独自の事例報告とともに、各対応する科目にどのように位置づけられているのかを明確にするために、年次計画における単元設定と評価の観点、評価の方法を明確にしていきたいと思います。

3つの分科会の発表は、いずれも学校の実態・課題の紹介、そして地域や地域資源を活用した実践事例という構成の発表となっていました。見通しを持った学習計画と評価のあり方を整理することにより、地域交流などの体験活動に至るまでのねらいを明確にすることにより、その過程を充実させることができます。

生徒数の減少や規模縮小にともなう教員数の減少が懸念される中においても、各農業高校では、地域や企業から、協力・連携の依頼が多く寄せられているのではないのでしょうか。その取組は何のためにやるのか、生徒に身に付けさせたい力が何なのかなどを定期的に振り返りながら、どのような教育活動が、生徒にとって学習成果が高まり、目指すべき人材育成につながるのかを吟味し、地域と地域の資源を有効に活用する活動に取り組んでいただければと思います。

分科会の発表は、教員同士の研修の場です。発表には、よりリアリティーがあつてこそ、共感や生きた学びの場となるはずです。どのような先生がどのような動きをして実践しているのか、誰がこの部分を担い、どのようなサポートがあるのか、農場の先生方との連携の在り方、打合せや情報共有の在り方、問題点や失敗の紹介と改善に向けて取り組んでいること、こういう生徒がこのように変容したという事例……。昨日の発表の中でも、原稿にはない、「実は……」という話が、聞く側に共感があつたはずです。教員研修の視点を持っていただければ幸いです。

以上、分科会について述べさせていただきました。

農業というフィールドを活用して、多様化する生徒の生き方・考え方を確立する教育活動を展開しながら、

将来のスペシャリストの育成、地域産業を担う人材の育成、人間性豊かな職業人の育成のために、多方面で先生方の力量が求められることとなりますので、今後も積極的に研鑽を積んでいただきたいと思います。

さて、次期学習指導要領では、新しい時代に必要となる資質・能力の育成として、「何を学ぶか」、「どのように学ぶか」、に加え「何ができるようになるか」を改定の視点としています。昨日も、田畑調査官から、新学習指導要領についてお話がありましたが、学習内容、学習指導における改善・充実については、表現こそ新しくなりましたが、農業教育そのものに大きな変化はありません。農業教育の「見方・考え方」を新たに整理し、これまで以上に、教育の在り方はこうあるべき、とわかりやすく道を示したのが、新学習指導要領であります。教科全体を、「知識及び技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の3つの柱で整理し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を図ることは、教員の質の向上に直結した考え方を示すものです。まずは日々の授業の在り方を見つめなおし、教員が互いに学び合う姿勢こそ、充実した学校・農場への第一歩となります。

いよいよ来年、農業クラブ全国大会が南東北3県を舞台に開催されます。今後も、農業高校で学ぶ目の前の生徒が、自信と誇りを持ち、地域社会の職業人として立派に成長するために、高い目標を掲げた教育活動が展開されるために、東北6県の皆様が、時にはライバルとして、時には有志として互いの関係を深め合い、農業高校が益々充実・発展されることを期待いたしまして、指導・講評とさせていただきます。ありがとうございました。